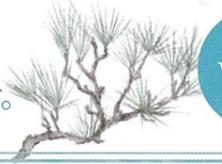


# よみがえれ! 海岸林

東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト10ヵ年計画」を、元日経新聞論説委員の小林省太がさまざまな角度でお伝えます。

Vol.6



左/カニの水揚げでにぎわう漁港(1972年ごろ、名取市撮影)

右/漁港での魚の仕分けは女性も総出だった(1967年、名取市撮影)

プロジェクトが進む宮城県名取市の海岸線は約5キロ。その一番南にあったのが北釜の集落だ。一方、北のはしには閑上がある。農家を中心で田畑や家が松林に守られていた人口400人ほどの北釜と違って、閑上はずっと大きく、何より漁業の町というイメージが私にはあった。今回から二回にわたり、これまで触れてこなかった閑上の話である。



今野義正さん

素手で殴り合っ  
て番長を決めた

閑上で海浜植物ハマボウフウの保護活動をする特定非営利活動法人(NPO法人)「名取ハマボウフウの会」理事長の今野義正さん(76)によると、子どものころは、「けんか得物(武器)を持ちっかいけない」という決めごとが閑上にはあった。クラスの中で二人が覇を競い互いに引かないときなど、上級生を行司役に立てて砂浜で素手で闘う。一方が「負けた」とギブアップしたり、泣いたり、鼻血を出したりしたら決着。血で汚れたシャツは海水で洗い、何食わぬ顔で家に帰る……。「板子一枚下は地獄」などと言わ

ら人が集まる場所でもあったのだ。

れた船乗りや漁師の世界、トップが決まらぬと命にかかわる、ということでもあるらしい。「農村ならこんな白黒のつけかたはしないでしょうね」と今野さん。

少し時代が下っても、雰囲気は残っていた。いま、毎月のようにプロジェクトのボランティア活動に参加する齋藤静子さん(53)は宮城県亶理町に住んでいるが、閑上の出身。知り合いの漁師が魚やアカガイをバケツいっぱいポンと玄関に置いていくようなことが、子どものころよくあったという。「一番驚いたのは、マンボウが一匹、玄関のすぐ外の地べたに丸のまま横たわっていたときです」。人のつながりが強く、いたずらをすると「ありゃ〇〇のところの2番目の娘だ」などとわかってしまい、すぐ親に伝わって



齋藤静子さん

怒られた。にぎやかで少しばかり荒っぽかった閑上の様子が、それぞれの話から伝わってくる。そんな閑上の人々と海岸林との関係はどうだったのだろうか。というのも、プロジェクトが始まった当初に現場を訪ねてすぐ気づいたことが、名取の海岸林の南端にあった北釜集落に比べ、北端の閑上地区の人々とプロジェクトとのつながりの薄さだったからだ。閑上は北釜の15倍、6000人も人口があったのに、と疑問にも思い、今回いろいろな人に話を聞いてみたのである。

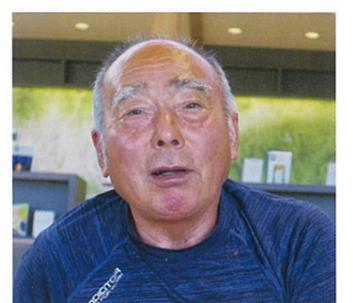
震災4年前の写真に松林(写真⑦)が黒々と映っている。閑上の町の東側の海辺にも海岸林があったことがわかる。その海岸部を地元の人々は「須賀」「東須賀」と呼んでいた。須賀は海岸などの砂地、砂丘を指す言葉である。

ただ、松林に接するように家を建て田畑をつくっていた北釜とは異なり、閑上の町や漁港(①)と須賀との間には広浦(③)という入江が深く入り込んでいる。海岸へは広浦橋(②)を渡っていくのだが、橋がかかったのは195



「景気がよくてね。酔っ払った漁師が毎日歩き回っていたっちゃ」と往時を語るのは、いまもアカガイを採っている閑上の漁師、小齋力男さん(76)。昭和20年代後半、小学生のころの思い出だ。「閑上漁港は仙台に近く、塩釜港と共に大都市仙台に対する魚類の二大供給港である」。そんな記述が1977(昭和52)年発行の「名取市史」にみえる。

小さな商店しかなかった北釜に対し、閑上は古くから繁華な漁師町だった。戦前には、ガソリンで走る軽便鉄道が閑上と現在の東北本線名取駅の間約6キロを結んでいた。北釜で生まれ育った80代のお年寄り「歯医者さんさゆ



小齋力男さん



閑上住民ら1100人が集まって松林の中で開かれたサイクリング大会(1982年、名取市撮影)



閑上の道筋には銀行、文具店、食堂などが並んでいた(1963年、名取市撮影)



① 関上漁港 ② 広浦橋 ③ 広浦 ④ サイクルスポーツセンター ⑤ 名取川 ⑥ 貞山運河 ⑦ 海岸林 ⑧ かつての漁船修理場 ⑨ 太平洋  
震災前の関上(2007年5月、東北地域づくり協会撮影)

6(昭和31)年。それまでは、地元で「さくば」と呼ばれた底の平らな小さな木舟を使うか、ときおり腕白坊主が泳ぐかして渡るしかなかった。小学生にもなれば、多くの男子は櫓や「けいぼう」と呼ばれた棒でさくばを操ることができたそうだ。

### やはり北釜の 人にはかなわない

ガスが普及する昭和40年代ごろまでは、かまの焚きつけにする松葉や松ぼっくりを集める。あるいはキノコを探る。松林と生活とのかかわりは北釜も関上も同じだった。関上の子どもが須賀へ行くことは、家の手伝いでもあり遊びでもあった。

「キノコはたくさんあったみたいだが、「ここにある」と言われてもよく分からない。うまい人はちよつと地面が盛り上がり上がっているだけで見つけろけど、こっちは三分の一も採れなかったね。ヒバリやカワラヒワ、チドリの子を探したり、ヒワッコは鳥もちで捕まえたりもしましたよ」と小齋さん。今野さんは「キノコ

の採れる場所は人には教ええないだよね」。

少し後、広浦橋ができてからのことだが、齋藤さんはいう。「雨が降った後はアミタケがよく採れるからと、おばあちゃんが須賀に行きたがるので、よく姉と私が用心棒代わりについて行きました。採れたものは塩漬けにして保存するんです。小学生は6年から1年まで地域で班をつくって集団登校をしていたので、夏休みにはそのグループで橋を渡って、三本松という太いマツのところでボール遊びやゲームをしてお昼を食べて帰ってきました。林の中は薄暗くて、ちよつと怖いと思いがながら自転車走っていると、カニが出てきたりして」。幼いころの思い出を語るとき、だれもが楽しそうだ。

しかし、「松林への愛着は、やはり北釜の人にはかなわない」というのは、震災体験や郷土史の発信を続ける資料館「関上の記憶」で語り部をしている渡辺成一さん(69)である。パッタ(メンコ)、駒返し、野球、広浦での貝捕りやハゼの手づかみ……子ども時代にはこうした遊びに加え、

松葉やキノコ、ハマボウフウを当てて「さくば」で東須賀へ出かけた。キンタケ、ギンダケ、ハツタケ、アミッコ(アミタケ)、シヨウロ。キノコにも詳しい。南の北釜まで歩いていたり、時に北釜の畑でいたずらをしたりもした。

「でも私たちは結局、松林には何かをとりに行つたんですね。目的がないと行かなかった。日々の生活と松林の距離は、物理的な意味だけでなく北釜の人たちと比べて離れていた」

その距離は、広浦がつくただけではない。マツの植林や管理にだれが携わったかという問題もある。菊池慶子・東北学院大教授は論文「仙台湾岸における防災林の植林史」に、「名取海岸の植林事業で現場の作業の中心を担ってきたのは、近代以降も一貫して、北釜の住民である」と書いている。例えば、戦前の1936(昭和11)年、関上の東須賀でマツのために防風垣の設置作業をした34人のうち33人が北釜の人だったと、県の文書に記されているという。

戦後、現在の漁港の対岸の浜では年に一回、漁船を陸に

引き揚げて修繕していた(⑧)。菊池教授によると、そのあたりのマツは1955(昭和30)年前後にあらためて植えられたものだ。小齋さんも葦簣で囲まれた浜に小さなマツの苗が植わっているのを覚えていた。葦簣は砂が飛ぶを防ぐための堆砂垣だが、「ウサギかなにかがマツを食べるのを防いでいるのかと思ってた」という。

そこから800mほど松林を南にいくと石碑があった、その近くの林の中には番人だか管理人だかのような人の一家が住んでいた、という記憶も小齋さんにある。その碑はおそらく大正天皇即位の記念植樹を記録するため1916(大正5)年に建てられたもので、震災後に広浦の水辺で



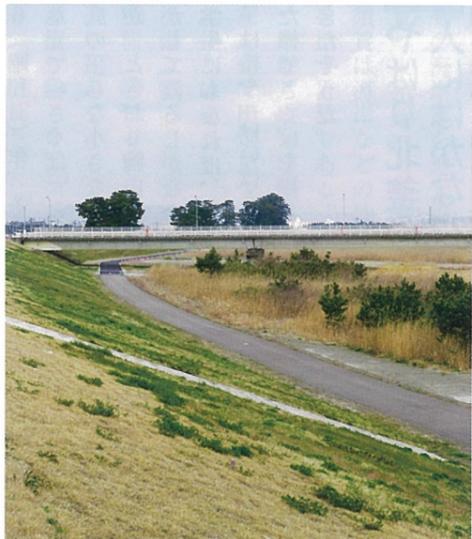
「関上の記憶」で資料を整理する渡辺成一さん

見つかっている。石碑や林の中の住人は渡辺さんの記憶にも残っている。

そうした思い出は鮮明な二人が、マツをだれが植えたのか、管理はどうしていたのかについては「聞いたことなかったね」「分からないですね」と口をそろえる。震災後、お年寄りの話を集めた「関上」津波に消えた町のむかし「暮らし」という冊子が出版されている。子どものころ須賀に渡ってハマグリを掘り、焚火で焼いて食べた。その味はいまも忘れられない——冊子のなかにそんな思い出はあっても、海岸のマツと生活とのかかわりを語る人はいなかった。

### 「あんどん松」もあるけれど……

国土のインフラでもある保安林には、森林法で定めた17の役割がある。海岸林は「飛砂防備」や「防風」「潮害防備」さらには「保健(レクリエーション)」を担っているのだが、もしかしたら「魚つき保安林」にもあたるのではないか。「魚つき」とは、水面に影を落と



あんどん松はいまも遠くからよく見える(2019年4月)

したり海に養分を供給したりして魚が増えやすい環境をつくることである。そうひらめいて小齋さんに尋ねたのだが、「そんな話は知らないなあ」。漁業と海岸林との関係は、やはり薄いのだった。

名取川(⑤)の、写真よりも少し上流の土手には「あんどん松」という立派なクロマツ並木がいまも残っていて、これは「昔は方向を見るのに使っていた」と小齋さん。遠くの山と組み合わせて海上の位置を知ったりもした。これは「山合わせ」と言った。ただ、漁船の目印になるように行燈をマツにつるしたから「あんどん松」だという話になると、「多分につくられた物語で

はないか」と渡辺さんは疑問を感じている。行燈をつるすといつても、だれが、いつ、どのように、という記録はなく根拠がはっきりしないからだという。「本当に愛着があれば記録が残っているはずだと思いますよ」

松並木は確かに遠目によく見えるが、渡辺さんの子どもころはみんな、ただ「土手の松」と言っていたそうだ。そういえば、名取市が建てた「あんどん松」の案内板には「漁師が灯台がわりに目印にしていたとも伝えられています」とあった。「とも伝えられる」とは、根拠があいまいなことをなれば白状するときの新聞記事の常套句でもある。



☆次回は7月号に関上についての続きを書く予定です。

公益財団法人 **オイスカ** 〒168-0063 東京都杉並区泉2-17-5  
☎(03)3322-5161 ☎(03)3324-7111 E-mail: kaiganrin@oisca.org

■海岸林再生プロジェクト ホームページ  
<http://www.oisca.org/kaiganrin/>

ブログは毎日更新中!



#### プロジェクトへのご支援・ご協力をお願いします!

- 郵便局から(お名前・ご住所・電話番号などを払込取扱票に明記してください)  
口座記号・番号……00100-6-482316  
加入者名……海岸林再生募金
- 銀行から(お名前・ご住所・電話番号などは別途下記にお知らせください)  
銀行名……三菱UFJ銀行 永福町支店(支店番号347)  
口座……普通 0054080  
名義……公益財団法人オイスカ(コウエキサイダンホウジンオイスカ)